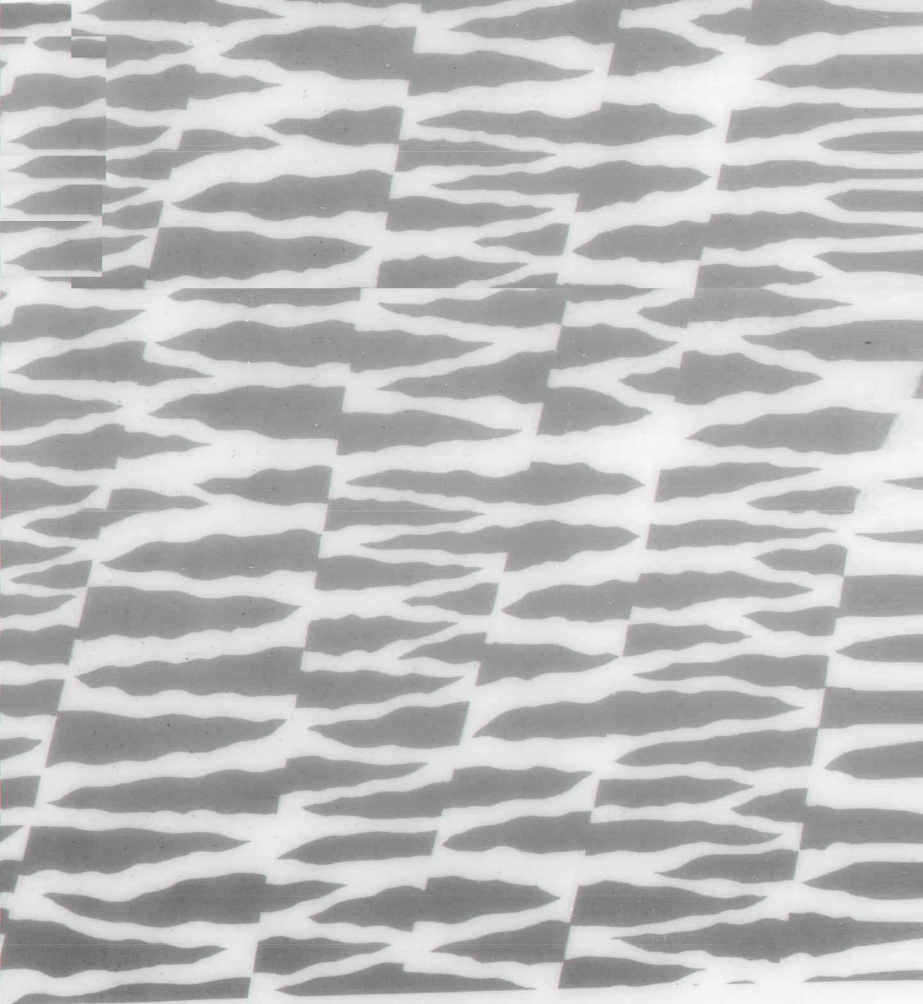


死の彼方からの光

真継伸彦





死の彼方からの光

真継伸彦

死の彼方からの光

一九八四年八月十日 第一刷発行

著 者 真継伸彦

発行者 涸沢純平

発行所 株式会社編集工房ノア

大阪市大淀区豊崎五―二―三大淀ビル

電話〇六（三七三）三六四一

振替大阪四―三〇六四五七

印刷・ナニワ印刷 製本・小幡製本所

©1984 Nobuhiko Matsugi

0095—844—7641

定価一六〇〇円

死の彼方からの光・目次

I

埴谷雄高氏の発想の一起点 8

高橋和巳の想い出 16

中国における感想 34

今日の韓国とわれわれ 50

II

文学することの意味 72

金芝河氏の釈放を聞いて 76

ただ、今ひとたびの生を 79

終末観と宗教者 83

日本人の自由精神と合理主義精神を培う 88

死の彼方の仏 94

花を集める蜂のように 98

命がけの求道者・日蓮 103

日蓮の優しさにつつまれて 107

余残の白煙に包まれて 112

故郷秋色 118

Ⅲ

おそろしい思い出 122

三十六度目の敗戦記念日に 126

哲学者の傍らで 130

雑司ヶ谷にいたころ 135

大山定一先生の想い出 140

リルケとゲーテ 146

『わが薄明の時』 150

『光る聲』の背景 156

『無明』を書いていたころ 168

『鮫』と『無明』のふるさと 173

親鸞と蓮如 177

中じきり 182

Ⅳ

宗教と政治 190

歴史にどう挑むか 212

あとがき 240

死の彼方からの光

埴谷雄高氏の発想の一起点

私は今、いわば強いられた飛び入りという恰好で、皆さんの前に立っております。と言いますのは、今年の高橋和巳君を記念する集会は、埴谷さんの『死霊』の新刊の祝賀を兼ねて、北大、東北大、京大、九大の四大学で開催されることになりました。そして私の当番は明日の九大で、京都では話すように言われておりませんでした。何となく京都へ参りましたところ、是非しゃべるように、それまでできるだけ沢山しゃべるようにと言われたわけです。

私は実は、酒を飲むつもりで京都へ参りました。五月三日が高橋君の命日ですが、毎年そのころになると、私は酒を飲みたくなります。もう私も若くなく、度を過ぐすとあとで二日酔どころか、三日酔になって苦しむのですが、高橋君とつき合っていたころのように、度を過ぐすまで飲みたくなります。私は去年『親鸞』という本を書きましたが、親鸞は身近な人を亡くして悲しんでいる人がいますと、酒を飲みなさいとすすめておりました。親鸞自身もそうしていたのでしょう。実際、ほかに手がないわけで、高橋君の命日前後になると酒を飲みたくなるのは、もちろん私だけではありません。彼の大勢の友人たちが何かしら飲みたくなって、何となく京都へ集まり

たくなる。私もその一人で、京都へきて、そして京大へきて控室で埴谷さんと顔をあわせたのですが、すると、タダ酒を飲むのはいかんと言われたわけです。君がこの大学を卒業したとき、総長だった亡き滝川幸辰氏は卒業式で、タダ酒を飲むなど訓示したそうだが、その精神を守れと言われまして、それでここに立つようになった次第です。

そういう事情だから、何も準備はしておりませんので、さきほど舞台裏で埴谷さんの講演を聞いていて、私もいくつか感想を持ちましたので、それを話してみたいと思います。

一つの感想は、埴谷さんは皆さんにむかって、いわば一期一会といった感じで話しておられたわけですが、やはり一人の人間が、思想家が、生涯をかけて考えつづけてこられたことを、とても四十分程度で話せるものではない。ずいぶん端折って話しておられるな、と私は聞きながら思っておりました。私はつい、いくつか補足したくなりました。といっても、私自身の埴谷文学にたいする理解のすべてをお話することも、到底できません。いくつか焦点をしばらくしなければなりません。私は聞きながら、「あらゆる発想は明晰であるということについて」という、埴谷さんの若いころのエッセイを思いだしておりました。『死霊』は最初「近代文学」に連載され、昭和二十三年にはじめて単行本になったのですが、難解さには当時から定評がありました。埴谷さんはこの定評に應えて、内容は難解かもしれないが、自分がこういう小説を書くようになった出発点、発想とは想像を発することでしょうが、文学的想像や思考を展開させていったその出発点にあった問題意識は、きわめて明晰なものである、いわば、私たち人間に普遍的な問題を、自分も考えているにすぎないという趣旨のことを書かれました。埴谷さんの最初期の評論集である

『濠渠と風車』の中に入っておりますので、まだの方はお読みになったら参考になると思います。私はそして、埴谷さんの話を聞きながら、その発想の一つに、

「自分がこんな世の中に生まれてきたはずがないという思いこみ」

があったことを思いだしました。何に書いておられたのか、今ちよつと思いだせませんが、埴谷さんは何度も同じことを言っておられるはずで、私がこの文章にふれたのはごく若いころでした。そしてそのときは、ずいぶん無理な思いこみであるな、と思ったものです。「自分がこんな世の中に生まれてきたはずがない」という思いこみの動機の一つには、自己存在であると同時に関係存在でもある自分は本来、自由と平等と平和が同時に実現されている世界に生まれていべきである、しかし現実には生まれてきた人間世界には、無限の過去から無限の未来にいたるまで、不自由・不平等・不和のみが存続するだろう。だとすれば本来の自分は、こんな世の中に生まれているはずがないという自覚が成立しているでしょう。ずいぶん明晰ではあるがしかし、埴谷さんも皆さんも、私も、言うまでもなく世界内存在であって、この世界の諸関係と切りはなして、事実として存在できないわけです。ですからこの思いこみは、ずいぶん無理な思いこみでもあるなど、私は最初読んだときに思ったのです。

埴谷さんはしかし、高橋君もそうでしたが、仏教やジャイナ教というインド思想にも深い関心を寄せておられます。私にも関心があつて、今はしだいに仏教的な思考が身についてきているような感じがしているのですが、そのうち、今紹介した埴谷さんの思いこみは実は、仏教本来のものではないかと考えるようになってきたのです。周知の例をあげますと、有名な『般若心経』の

中に不生不滅という言葉がありますね。仏教の根本問題は「私とは何か」ということです。が、仏教はこのように、ほんとうの私は不生不滅である。この世に生まれていなければ、当然ながら滅びることもないと主張するのです。これが仏教に伝統的な主張であって、たとえば鈴木大拙が紹介した盤珪という江戸時代の禅僧も、「わしもおまえもほんとうはこんな世の中に生まれておらん、だから滅びるはずがない」と説いていたそうです。埴谷さんのさきの主張と似ていますね。

私はそこで埴谷雄高氏は、たいへん仏教的な思想家である、仏教の伝統に即し、それを独自に展開している思想家ではないかと、だんだん考えるようになってきたのです。ここで伝統ということについて一言補足しておきたいのですが、それは、伝統は模倣によつては継承されないということです。T・S・エリオットが指摘しているように、自分が生涯をかけてした模倣の結実が、先人が生涯をかけてした模倣の結実と同一であったときに、はじめて伝統が継承されたことになるのですね。「私とは何か」という問題はもちろん、だれもが考えるべき明晰な発想でしょう。すぐれた仏教徒たちは生涯をかけてそれを究明した。埴谷さんもむろんそうである。そしてその帰結が「不生不滅」とか、「自分がこんな世の中に生まれているはずがない」とか、まったく相似た結論をもたらしているわけです。

皆さんの中にはこれまでの話を聞いていて、ハテナ？　と思った人がきつと多いことでしょう。何故なら私たちは間違ひなく生まれてきたのだし、間違ひなく老病死という経過をたどるのですから。そういう現象としての私と、本質としての私とを如何にして峻別でき、現象としての私の背後というか根底というか、わけのわからない所にあるかもしれないその本質としての私が、不

生不滅であると、どうして確証できるのか。べつの言い方をすれば、生まれかつ滅びる現象としての私は有限なる存在であるが、それがどうして仮象にすぎないと言いうるのか、言いうる根拠としての無限なる、つまり不生不滅なる私をどうして提示できるのか。そういう疑問を抱いた方はきつと大勢いらつしやるでしょう。これは実際に大問題であつて、不生不滅なる真我というものを、簡単には提示できないのですね。ですから埴谷さんも「思いこみ」と、「自分がこんな世の中に生まれてきたはずはない」と言つておられるわけですね。そしてその「思いこみ」において成立している私、つまり私が思うということにおいて成立している私も、もちろん現象としての私であつて、思いの消滅とともに消滅してしまうものですね。

仏教ではこの「現象としての私」、あるいは「有限なる私」を「空」と言います。『般若心経』にある「色即是空」の「空」で、「色即是空」とは「いっさいの形体に実体性がない」という意味です。実体とは恒常不可分なるものという意味ですから、生まれかつ滅びる私たちに実体性がない、むしろアブクのような、幻影のような存在であるというのは、まったく自明の判断ですね。反対にキリスト教のように、私たち人間は神という完全な実体が創造した、不完全な実体であるという規定のほうは自明ではないわけです。

仏教はしかし有限なる私たちを、ただ単に空と認識するだけではありません。私たちの存在性には、みずから生まれでた者ではない、ということがあるので、私たちを生みだし支えているものは何かと仏教は反省します。私たちには、私が生きているということと同時に、私を生きている何かが存在しているわけですが、仏教徒は私に執着せず、おのれを空しうして、その、私を生

きているものの実態を究明しようとします。おのれを空しうする行為の代表が坐禅、つまり、自己本位の行為のいっさいを繫縛する、自己否定的な行為ですね。仏教徒はそしてその結果、私たちを生きているものは煩惱であり、無明であると、ごく唯物論的な主張をします。キリスト教のように、神という超人格的な創造主の存在を認めないのですね。煩惱とは簡単に言えば我欲、私たち一人一人に個体化している欲望のことで、無明というのは、私は、「だれがしているのでもない、みずから知らざる行為」と解釈しております。そういう無明なる宇宙の行為の所産として、ちっぽけな私たちが束の間、ちっぽけな地球の上に存立しているわけですね。無明が生みだし支えている煩惱が、さきほどは不自由・不平等・不和という三語に要約しましたが、そのように、ロクでもないことを無限にくりかえしているというのが、仏教の人間観です。人間はロクでもないことばかりしているぞと知っていて悲しんでいるのが、ほんものの仏教徒というものです。ですから、せめて自分ではできるだけ他人や他の生命を傷つけないとして、消極的に禁欲生活をつづけるのが、釈尊いらいの、本来の仏教徒の生き方だったのです。彼らは粗衣粗食に耐えて坐禅に代表される黙行に精進するのですが、面白いことにそこには、「煩惱を消滅せしめてなお存在している私」というべきものが実現されているのです。仏教徒たちはそういう状況において、そういうおのれを、不生不滅と主張しているのですね。言葉によってよりも、沈黙の実証において証明しているのであって、生きながら死んでいるような、煩惱の消滅したその状況を、寂滅といいます。これは埴谷さんが、自分の心境を訊ねられたときに、一語にして答えられた言葉でもあります。埴谷さんの外見は私たち同様、ごく煩惱的な存在であって、私も酒やワイ談やヘボ碁

の相手をするところがあるのですが、心の奥の奥では寂滅している、不生不滅であると言っておられるわけです。

この不生不滅ということを言葉でわかりやすく説明しようとすれば、埴谷文学の究極の志向の一つである、宇宙の涯へ行きたいという願望について説明するのが便利だと思います。実は今日の埴谷さんのお話は、『闇のなかの黒い馬』という連作の説明であつたのですが、この連作は、現実には到達不可能な宇宙の涯へ、想像によって到達しようとした試みの成果で、埴谷さんはそのために、私流に申しますと、煩惱の支配を脱却した夢を見ようと試みられたのです。なかには『私のいない夢』という、まことに仏教的な、おのれを空しうした夢を見ようと試みた作品もあります。ご存じのように私たちが見る夢には、かならずや見る者としての私が登場しています。それは煩惱に支配された夢にすぎず、無我の境地に達した釈尊なら、夢を見ることがあるとしても、そんな夢は見ないでしょう。埴谷さんはそういう、釈尊が見るような夢を、小説に書いてみようと試みられたわけです。

ところで宇宙の涯というのは、矛盾した表現ですね。私たちが住んでいる銀河系宇宙をふくめてすべての星雲は、ものすごい速さで宇宙の涯へたどりつこうと走っている、膨張していると言われます。宇宙それ自体が、みずからの涯を見出そうとして奔走しているわけですが、その宇宙の涯がもしあると仮定して、そこに壁のようなものを想像しても、壁のむこうがかならずや存在していなければなりません。ですから宇宙の涯というのはありえない。そもそも宇宙というもの、私たちが日常「コップがある」とか「コップがない」とかいう、そういう有無を絶した存在